

## 九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻(四)

梁, 丹  
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1518336>

---

出版情報 : 文献探究. 53, pp.25-40, 2015-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻(四)

梁丹

翻刻

凡例

(83・才)

蔵人少将の

きみ、「世に人こそおほかれ、かゝるおもしろのこまを、ひきよせ給ひしぞ。いといふかひなかりけるわざかな」、

(83・ウ)

- 一、九州大学附属図書館蔵(54オ7)『おちくほ』を底本とした。
- 一、できるだけ底本の表記通りに翻刻することに努め、漢字、仮名などもすべて原文のままとした。
- 一、誤謬、脱落と考えられる箇所も、底本の通りに翻刻し、著しい脱落箇所を「★」で示した。
- 一、底本に句読点、濁点がないが、適宜私に付し、会話文には「」を施した。また、底本では、和歌の終わりはそのまま地の文に続けるが、ここでは「」で示した。
- 一、底本に施された後人の手によると思われる朱筆の見せ消ちは、書体が紛らわしいため、正を期して記したのも少なからずあるが、それらも含め原文に線を引き、その右に記した。また、後人による補入箇所は、「○」で本文中に記載し、その右に補われた語句を示した。
- 一、反復記号は、原則として底本のままの表記を心がけたが、漢字の後の「く」、「々」等は「々」に統一した。
- 一、丁数は頭に( )で示し、丁の表裏はオ・ウと表示した。

(84・才)

「かゝるものといで入せんこそわびしけれ。殿上のまりとつけて、かしらもえさしむぬしれものゝ、いかでよりきにけん。そこたちのみはかりてしたまふるならん」とわらひ、てうろうしたまへば、三のきみ、さらにしらぬよしを、いとをしがりなげき給ふ。かゝるひがものなれば、よづかぬふみはかきいだしたる成けりと、人しれずおもひて、いみじくいとをし。北方の心地たゞおもひやるべし。みむまの時まで手もあらはせず、物もくわせで、ありと有かぎり、その御かたにとておほかりし人々、「たれかそのしれものにつかはれん」とて、きにもいでこず。つくぐとふしたるに、四のきみみるに、かほのみぐ

るしう、はなのあなよりは人とをりぬべく、ふき

いららげてふしたるに、こゝろづきなく、あいぎやう  
なくなりて、やをらものするやうにて、おきていでた  
るに、北方まちうけてのたまふ事がぎりなし。

「おいらかにはじめよりかうくしたりといはましかば、  
しのびてもあらましを、所あらはしをさへして、かくのゝ  
しりて、われも人もゆゝしきはぢをみる事。たが

なかうどしてしはじめしぞ」と「いへ」とせむれば、四の君、  
あさましいみじうなりて、たゞなきになく。われ

かゝるものあらんともしらぬに、かくつきくしくいひ  
ければ、あらがふべきかたなし。蔵人少将いかにおもひた  
まふらんと、女の身は心うきものにこそありけれど

(84・ウ)

なけば、いふかひなし。せう、いつとなくふしたりけれ

ば、おとど、「いとをし。かれにてあらはせよ。ものくれよ。かゝる  
ものにしてられぬといはんは、またたてもなくいみじ

かるべし。すぐせやさしも有けん。いまはなきのゝしると  
もことのきはらまばこそあらめ」とのたまへば、北方、「あた

らあが子を、なにのよしにてか、さるものにくれては  
みん」とまどひ給へば、「あしき事なの給ひそ。かゝるもの  
にすてられぬといはんは、いかゞいみじかるべき」。北方、

「こずならん時やさもおもはん。たゞいまはほさせまほしく  
ぞある」との給へば、ひつじの時まで人もめみいれねば、  
せう、くるしうて出ていにけり。夕さききたるに、四のき

みなきて、さらに出給はねば、おとどはらだち給ひて、

(85・オ)

「かくおぼえ給ひけんものをば、なにしかはしのびてよび  
よせ給ひし。人のしりぬるからにかくいふは、おや、はら  
からに、ふたかたにはぢをみせたまはんとや」と、出ゐて

せめ給へば、いみじうわびしながら、なくく出ぬ。せう、な  
き給ふを、あやしとおもひけれど、ものもいはでふしぬ。  
かく女も、わびしとおもひわび、きたのかたも、とりはな

ちてんとまどひ給へど、おとどのかくのたまふに、つゝみ  
て、いで給ふ夜、いで給はぬ夜有けるに、すぐせこゝろ  
うかりける事は、いつしか、子はらみ給へば、「いかでと、むま

せんとおもふ少将のきみの子は出こで、このしれものゝ  
ひろること」くのたまふを、四のきみことほりにて、いかで  
しなんとおもふ。蔵人少将、おもひもしるく、殿上の

(85・ウ)

きみたち、「おもしろのこまはいかに。此ごろとしかつらば、御ひ  
きにてあお馬にいだし給へ。きみとあれば、いづれをか

おもひましたる」とてわらふに、ちりもつかじとおもふ  
こゝろに、いとくるしとおぼゆ。もとよりも、いとおもふやう

にはおぼえざりしかど、いみじういたはらるゝにかゝりて  
ありつるを、これことづけて、すてんとおもひなりて、  
やうくこぬ夜のみおほかれば、三の君、物おぼす。かの二

条には、日々にあらまほしく成まさり、男君のも  
てかしづき給ふ事がぎりなし。「人もいでもまいらせ  
給へ。女房おほかる所なん、こゝろにくゝはなやかにもき

こゆる」とて、これかれにつきつゝ、ひきくゝにまいれば、

廿余人ばかり。おとこぎみもおんな君の御ごころのどや

(86・オ)

かによくおはすれば、つかうまつりまりよし。まいりまかで、そ

ぞきかへつゝ、いまめかしき事おほかり。衛門を第一

のものにしたまへり。たちはき、おもしろのこまのこと

をめにかたりければ、した心には、いみじうねたかり

したうすばかりの身にもがなとおもひしるしにや

と、うれしけれど、「あないとおしや。北方いかにおぼすら

む」、「さいなまるゝ人おほからんかし」といふ。かくてつごも

りになりぬ。大將殿よりは、「少將のきみの御さうぞく、

いまはとくし給へ。こゝには内の御事にいとまなく

なむ」とて、よきゝぬ、あや、あかね、すわう、くれないなど

などおほく奉給へれば、もとよりよくしたまへる

事なれば、いそがせたまふ。さて、少將のきみに

(86・ウ)

つきたてまつりて、むまのぜうになりたるゐ中の

人のとくある、きぬ五十まいらせたれば、人々にさまぐ

たまはず。衛門、とりくばりしをきつるも、めやすくみゆ。

此二条殿は北方の御殿也。女二所、おほい君は女御、

男は太郎はこの少將、二良は侍従にて、あそびをのみ

したまふ、三郎はわらはにて、殿上し給ふ。ちごお

はしけるより、此少將をよになくかなしうし奉り

給ふに、人にほめられ、御門もよき人におぼしめし

たれば、ましていかならん事をし給へりとも、の給ふ

まじ。かの御事になれば、おとゞえみまけ給へれば、との

につかうまつる人、ざうしきうしかいまで、此少將殿に  
なびき奉らぬなし。かくて年返て、朔日の御さう

(87・オ)

ぞく、色よりはじめて、いとよきよらにし出でたまへれば、

いとよしとおぼして、きてありき給ふ。御母北方、

みたまひて、「あなうつくし。いとよくし給ふ人にこ

そのし給けれ。うちの御かたなどの御大事あらん

には、きこえつべかめり。はりめなどのいとおもふやうに

有」とほめ給ふ。つかさめしに中將に成給ぬ。三位し

たまひて、おぼえまさり給ふべし。三の君の藏人少將、

かの中君をきこえ給ふを、「いとよき人ぞ。たゞ人

とおぼさば、これをとりたまへ。みるやうあり」とつねに

申給ふ。かの北方、これをいみじきたからにおもひて、

これがことにつけて、わがめをてうぜしぞかしとおもふに、

いとすてさせまほしきぞかし。中將かくいふを、みるや

(87・ウ)

うぞあらんとて、時々へんじさせ給ふに、少將たのみを

かけ、三の君をたゞかれにかれゆく。よしとほめしきう

ぞくも、すじかい、あやしげにしいづれば、いとゞことをつ

けて、はらをたちて、しかけたるきぬどもゝずて、「こは

なりわざしたるぞ。いとよくぬいし人は、いづちいにし

ぞ」とはらだちて、三の君、「おとこにつきていにしぞ」と

いらへ給へば、「なぞの男につくべきぞ。たゞにぞ出にけん

こゝにはよろしきものありなんや」とのたまへば、三の

きみ、「されど、ことなる事なき人もなかるべきにこそ

あめれ、御ころをみれば」といへば、「さ侍り。おもしろのこま侍めり。よにめでたき人もまいりけりと、心に

くゝおもふ」など、まれくきては、ねたましかけていぬ  
(88・オ)

れば、いみじうねたみなげゝど、かひなし。北方、おちくぼのなきをねたういみじう、いか、くやつのためにまはししきふせんとまどひ給ふ。「われはさいわいあり、よきむこと」といひしかひなく、おもてをこしに思ひしきみは、たゞあくがれにあくがる。よきわざとて、いそぎしたるは、世のわらはれぐさなれば、やまひ人になりぬべくなげく。正月晦日に、よき日ありけるに、ものまふでする人ぞよかなる、とて、三、四の君、北方などして車ひとつして、しのびて清水にまふづ。折しも、こそあれ、三位の中将の北方、男君もまふで給に、中納言殿の車はとくまふで給ければ、さいだちゆく。しのびたりとて、ことに御せんもなし。かいすみとり。中

(88・ウ)

将殿は、おとこぎみおはしければ、ごぜんいとおほくて、さきおいちらして、いとまうにてまふで給ふ。さきなる車は、しりばやにこされて、人々わびにたり。さいまつすきかげに、人のあまたのりたればにやあらん、うしくるしげにて、えのぼらねば、しりの御車

どもせかれて、とゞまりがちなれば、ぎうしきどもむつかる。中将の人をよびて、「たがくるまぞ」とはすれば、「中なごん殿の北方の、しのびてまふでたまへる」といふ

に、中将、うれしくまふであひにけりと、したには

おかしくおぼして、「をのこども、『さきなる車とくやれ』といへ。さるまじくは、かたはらにやうせよ」との給へば、御せんの人々、「うしよはげに侍らば、えさきにのぼり侍らじ。

(89・オ)

かたはらにひきやりて、此御車をすぐせ」といへば、中将、「うしよわくは、おもしろのこまにかけ給へ」との給ふ声、いとあいぎやうづきてよし有。くるまにほのきゝて、「あなわびし。たれならん」と怪まどふ。なをさきにたてゝやれば、中将殿の人々、「え引きやらぬ、なぞ」とて、たづてをなぐれば、中納言殿の人々、はらだちて、「ことゝいへば、大将殿ばらのやうに。中納言殿の御車ぞ。はやううてかし」といふに、此御とものぎうしきども、「中なごん殿にもおづる人ぞあらん」とて、たづてを雨のふるやうにくるまになげかけて、かたやふにあつまりて、をしやりつ。御車どもさき立つ。御せんよりはじめて人おほくて、打あふべくもあらねば、かたをほりにをし

(89・ウ)

つめられて、物もいはである。「中々むとくなるわさかな」と、いらへしたるをのこどもをいふ。のりたる北方をはじめて、ねたがりまどひて、「たがまふでたまふぞ」とへば、「左大将殿の三位の中将殿のまふで給ふ也。只今の第一の人にて、あしくあしくいらへた也」といふをきくに、北方、「なにのあたにて、とにかくにはちをみせたまふらん。この兵部のせうのことも、これがしたるぞかし。

おいらかに『いざ』といはましかば、さてもやみなまし。よそ人もかくかたきのやうなる人こそ有<sup>り</sup>けれ。なにものならん」とて、きたのかた手をもみたまふ。いとふかきほりにて、とみにえ引あげで、とかくもてさわぐほどに、輪すこしお

れぬ。「いみじきわざかな」とて、にないあげて、なはもと

(90・オ)

めてきて、ゆひなどして、「かへらんやは」とて、やうくのぼる。

中将殿の御車どもは、はしどのにひきたて、むごに

たちたまへるに、やゝ久しう有て、からうじてよるほひきぬ。「いとたけかりつくるま輪、おれにけりや」とて、ま

たわらふ。よき日にて、はしどのにひまもなければ、か

くれのかたよりおりんとおもひて、すぎてゆく。中将、たち

はきをよびて、「このくるまのおり所みてつげよ。そこ

にあん」とのたまへば、はしりいきてみれば、しりたる法師よびて、「いととくまふでつるを、この三位の中将とか

いふものゝまふであいて、しかくして、車の輪おれて、

いまで侍つる。局ありや」とて、「おりなん。いとくるし」

といへば、「いとふびんなる事かな。さらにみどうのまなん、

(90・ウ)

かねておほせられ侍しかば、とりをきて侍る。かの

中将殿もいづにかさぶらひ給はんずらん。ろんなう

えせものゝつぼねをそひしかれむかし。あはれ、いとふ

びんなるよなめりかし」といへば、「さはとくおりなん。人なき

局とて、とられなん」とて、いそげば、おと二人、「御つぼね

みをかん」とていくしりに立て、たちはき見をきて、はし

り返て、「かうくなん申つる。かれがいかなさきに」ておろす。御木丁さして、男君はなれ給はずかしづき給ふ事か

ぎりなし。中納言殿の北方、中将殿のおりぬさきにとて、

みなあゆみのぼるに、これはたいとぎしきことに、

そよく、はらくとくつすりて、たちはきさきにたて、

みちなる人々はらふ。車の人々さはぎたちあゆめば、

(91・オ)

道をふさぎて、さらにやらねば、はしたなくて、しばし

かいむれてたちたるをみて、「のちおいなる御ものまふ

でなめりや。つねにさきだち給とのみおぼい給ふため

れども、をくれ給ふは」とのみわらへば、誰もくいとねたし

とおもふく、みるも、えあゆみよらず、からうじて局にあ

ゆみ行ぬ。ほうしどうじひとりありけるは、かのつぼねあるじ

のおはするとおもひて、出ていぬ。みな入給ひて、中将、たち

はきをよびて、「かの人々わらはせよ」とさゝめき給ふを

もしらで、わがつぼねとおもひて、きて、いらんとするに、「あら

はなり。中将殿おはします」といふに、あきれてたてれば、

人々わらふ。「いとあやしや。たしかにあないせさせてこそ

おりさせ給はまし」。かくうわの空に御局あるまじかめる

(91・ウ)

ものを、いとくおしきわざかな」。にわうどうのをこなひ

をさせ給へ。それぞ所はひろかなる」とそらしらずして、

たちはきは、われとしられんはいとおしくて、わかうはやれる

ものどもにはやして、いはせてわらふに、はしたなき

事かぎりなし。なくにもはしたに、わびしといふは

おろか也。しばしたてるに、人はがしく、ついたをしつべ  
くありき○がへば、侘しく、あゆみかへるこちも、たゞおも  
ひやるべし。いきおひまさりたらば、いさかひかくして  
ぬべし。いとせんかたなし。これをそらにふみて、車  
まかへりのりて、ねたういみじうおもふ事かぎりなし。  
「なをたゞにおもはん人かくはせじ。おとゞをやあしと  
おもふらん。いかなる事にあり給ふらん」とあやまり

(92・オ)

てなげく中に、四の君、おもしろのこまいはれて、いと  
いみじとおもふ。だいとこよびて、「かうくしとられ  
ぬ。いみじきはぢにこそあれ。又つぼねありぬべしや」  
といへば、だいとこ、「さらにいまはいづこのかあらん。入るたる  
をだに、どのぼらのきんだちはをし居させたまふに、  
おそくおりさせ給ふがましてあしき也。いかゞせん。御くるま  
ながらあかさせ給べきなり。よろしき人ならばこそ、もし  
やといひ侍らめ、いまの一しの太政大臣も、このきみに  
あへば、おともせぬきみぞや。御いもうとりぎもなくときめき  
給ふてもたまへり。わが御おほへばかりとおほすらん  
人、うちあふべくもあらず」などいひていぬれば、かひ  
なし。おりなんとおもひて、六人までのりたりければ、

(92・ウ)

いとせばくてみじろきもせず。くるしき事、かの  
おちくぼのへやにこもり給へりしにもまさるべし。  
からうじてあけぬ。「このあいぎやうなしのいでぬさきに、  
とく帰りなん」といそぎ給へど、御車の輪ゆふほ

どに、中将殿御くるまにのり給ひぬ。れいのびん  
なかめれば、中納言殿の御車おくれんとてたてれ  
ば、中将殿、のちにもおもひあわせよ、むげにしるしなく  
はかひなしとやおぼしけん。ことねりわらはをよび  
て、「かの車のくちのかたによりて、『こりぬや』といひて

こ」とのたまへば、たゞよりによりて、かくいへば、「たがのたま  
ふぞ」といふ。たゞ、「かの御くるまより」といふに、「さればよ。  
なを

おもふ事有てするにこそ有けれ」と、さゝめきあやし

(93・オ)

がりて、北方の、「まだし」といひ出したりければ、わらはは、  
かくなんと申せば、「さがなもの、ねたういらへたなり。かくて  
おはずともしらじかし」とわらひ給ひて、「まだしにせぬ  
御身なれば、またやみ給はん」といはせれば、北方、「いら  
へなせそ。めざまし」とせいせられて、せさせねば、かへりた  
まひぬ。女君、「いとこゝろうく、けしからずはおはせしと、お  
とゞのちにきゝ給はん事あり。かくなの給ひそ」とせいし  
給ければ、「これにはおとゞやはのり給へる」とのたまへば、「君た  
ちおはすれば、おなじ事」とのたまふを、「いま、打かへしつ  
かうまつらんに、御こゝろはゆきなん。おもひをきし事  
たるべし」との給ふ。きたのかた、かへりたまひて、中納言殿  
に申給。「この大将殿の中將は、おとゞをやあしくしたま  
ふ」とあれば、「さもあらず。内などにもよい有  
てこそみゆれ」とのたまふ。「あやしき事かな。しかぐ

(93・ウ)



こそ有つれ。またなふねたういみじき事こそなかりつれとて、いひおこせたりつるせうそこよ。いかでこれにたうせん」ともまれ給へば、中納言、「われは老しゐて、おほへもなく成ゆく。かの君は、たゞいま大臣になりぬべきいきほひなれば、いといたうしがたし。さべうこそあらめ。名だゝしく、わがめ子となのりて、さるはぢをみわらはれん事よ」とて、つまはじきをしてまたなげきたまふ。かゝるほどに六月に成ぬ。中将せめていひそゝのかして、蔵人の少将を中君にあわせ給へば、中なごんどのに、きゝて、いられしぬばかりおもふふ。「かく

(94・オ)

せんとてわれをあしかりをきしにこそ有けれ」とて、「いかでかいきすだまにも入にしかな」とててがらみをし入たまふ。二条殿には、おもひかしづきたまひしものを、いかにおぼすらんとおもひやりて、いとをしがる。三日の夜、御さうぞくは、物よくしたまふとて、このとのになん奉給ふければ、女君、いそぎそめさせ、たちぬいし給ふにも、むかしおもひいでられてあはれなれば、

きる人のかわらぬ身にはから衣たちはなれ

にしおりぞわすれぬ」とぞいはれ給ひける。いとときよげにぬいかさねて奉らせ給へば、おほいどのゝ北方、かぎりなくよろこび給ふ。中将、いとおもふやうにしつとおもひて、少将にあいて、「いとおそろしき人もたまへりとお

(94・ウ)

ちきこえ給ひしかど、まちかくてきこえかたらはんの

本いありてなん、しゐてそゝのかしきこえたるを、わりなくとも、ゆめもとひとつにおぼすな」ときこえたまへば、少将、「あなゆゝし。よしきゝ給へ。ふみをだにものし侍てんや。御よういありと、うけ給しよりなん、かぎりなくたのみきこえし」とのたまひて、げにかへりみもしたまふべくもあらず。おほへも、女君も、こよなくまさりたれば、なにしにかはかよはん。かゝるまゝに、きたのかたいられまどひて、物もやすくはでなんななきける。中将殿に、よきわか人どもまいりて、いたはり給ふときゝて、かの中なごん殿の少納言、かくおちくぼのきみともしらで、弁の君がひきにてまいりた

(95・オ)

り。女ぎみみ給ふに、少納言なれば、あはれにおかしうて、ゑもんをいだして、「こと人かとこそおもひつれ。むかしはさらにわすれずながら、つゝましき事のみおほくて、えかくなんとも物せで、おぼつかなくおもひつるに、いとうれしくもあるかな。はやうこなたにものしたまへ」といはせられたば、少なごん、あさましくなりて、あふぎさしかくしたるも打をきて、いざりいづるこゝちもたがひて、「いかなる事ぞ。たがのたまりぞ」といへば、「たゞかくてさぶらふにおぼし出よ。そさよにはおちくぼの御かたときこえしよ。わたくしにもいとこそうれしけれ。むかしみ奉りし人はひとりも侍らで、かわりたる

(95・ウ)

こゝちのし侍つるに」といへば、少なごん、「いで、あなうれし



や。わがきみのおはしますにこそありけれ。よにわすれず、恋しくのみおぼつさせ給へるに、ほとけのみちびきたまへるにこそありけれ」とよるこびながら、おまへにまいりたり。みるに、かのへやにゐたまひしほど、まづおもひいでらる。きみはまづねびまさりて、いとめでたうてゐ給へれば、いみじくさいわいおはしけるとおぼゆ。そよくとさうぞき、かざみきたる人、いとわかうきよげなる、拾余人ばかりものがたりして、いとなまめかしげ也。「いととく御前ゆるさたまふ人、いかならん」、「われらこそさもなかりしか」とうらやみあへれば、「さかし。こはさるべき人ぞかし」とわらひたまふさまもいとをかしげなり。かゝれば、ちゝはゝのたちかしづき給ひ

(96・オ)

し御はらからどもには、こよなくまさりたまへるぞかしと、人のきくほどは、うれしきよしをいひ、人たちぬるほどには、少なごん、中納言殿の物語をくわしくすかのてんやくがいらへし事かたれば、ゑもんもいみじうわらふ。「北方、このたびの御むことりのはちがましき事、すくせにやおはしけん、いつしかといふやうにはらみ給へれば、こゝちよげにみえ給ひし北方も、おもひまつわれてなんおはすめる」。「四の君の御人は、あやしきことかな。これにはいみじうほめ給ふめるものを。はなこそことにおかしげにてあるとこそいはるめれ」とのたまへれば、少なごん、「てうろうしきこえさせ給へば也。御はなゝん、御はなこそなかにすぐれてみぐるしうおはすめる。

(96・ウ)

はなうちあふぎいらゝぎて、あなの大なる事は、左右にたいたて、しん殿もつくりつべく」などいへば、「いといみじき事かな。げにいかにいみじうおもひたまふらん」などかたらひ給ふほどに、中将の君、内よりいといたうゑひてまかだたまへり。いとあからかにきよげにておはして、「御あそびにめされて、これかれにしめられつるに、いとこそくるしかりつれ。ふえつかうまつりて、御ぞかづけ事侍」とて、もておはしたり。ゆるし色のいみじうかうばしきを、「きみにかづけ奉らん」とて、女君に打かけ給へば、「なにのろくならん」とて、わらひ給ふ。少納言をみつげ給て、「これはかのあたりにゐみし人にはあらずや」。「さなめり」。「いかでまへりつるぞ。

(97・オ)

かたゝの少将のゑんになまめかしかりしことのこりいかできゝ侍らん」とのたまへば、少なごん、いひし事わすれて、なにごとなん、あやしとおもひて、かしこまりゐたり。「いとくるし。ふしたらん」とて、みちやうのうち二所ながら入給ぬ。少納言、めでたくきよげにおはしける君かな、いみじくおもひきこえ給へるにこそあめれ、さいわいある人はめでたき物成けりとおもひたまへりける。さるほどに、右大臣にておはしける人の御ひとりむすめ、内に奉らんとおもへど、「われなからむあとなどうしろめたし。この三位中将、まじらひのほどなどに心みるにも、たのもしげあり

て、人のうしろみしつべきこゝろあり。これはせん。わ  
(97・ウ)

ざとの人のむすめにはあらで、はかぐしき人のめも  
なかなり。年頃かくおもひて、こゝろとどめてみるに、  
おもふやうなる人也。たゞいまなりもて出なん」との  
たまひて、しりたるたより有て、おとこぎみの御めの  
とのもとに、かうくなんおもふといはせ給へれば、御めのと、  
「かくなん侍る。いとやんごとなく、よき事にこそはべな  
れ」といへば、中将、「ひとり侍ほどならましかば、いとかしこき  
おほせならましを、いまはかくてかよふ所あるやうに  
ほのめかし給へよ」とて、たち給ぬれば、御めのとのお  
もふやうにて、たゞ君にのみこそかゝりたまふためれ、  
はなやかにかしづかれ給へらば、よからんかしとおもひて、  
きみのたまふやうにはいはで、「いとうれしき事

(98・オ)

なり。いまよき日して御文もとりて奉らん」などい  
ひやりたりければ、このとのはよしとおぼして、いそぎ  
てといはゞ、四月にもとらんとおぼして、御てうど、あ  
るよりもいかめしうしかへて、わかき人もとめ、けいめいし  
たまふ。「きみは右大臣ほかくむこになり給ふべかなり。此  
殿にしり給へりや」といへば、ゑもんあさましとおもひて、  
「まださるけしきもきこえず。たしかなるけしきか」  
といへば、「まことに此四月にていそぎ給ふものを」とつ  
ぐる人ありければ、女君に、「かうくこそ侍なれ。さるけしき  
しろしめしたるにや」と申せば、まことにやあらんと、あ

さましくおもひながら、「まださる事ものたまはず。た  
がいふぞ」とたまへば、「かの殿なる人の、たしかにしろた  
(98・ウ)

より有て、月をさへさだめて申侍る」といへば、こゝろ  
のうちには、此本はゝきたのほうししてのたまふにや  
あらむ、さやうなる人をしてゝのたまふは、きかで  
はあらじとしれずおぼして、こゝろづきぬれど、つれな  
くて、のたまひやするとまたれ給へど、かけてもいひ出た  
まわず。女、心うしとおもひしきやなをすこし見え  
けん、中将、「おぼす事やある。御けしきにこそさりげなれ。  
まろはよの人のやうに、『おもふぞや、しぬや、こひしや』な  
どもきこえず。たゞ、いかでものおもわせ奉らじと  
なんはじめよりおもへど、かゝる御けしきの、この程  
みゆるはいとくるし。心うしとやおぼさんとて、は  
じめもさいみじかりし雨に、わりなくてまいりし

(99・オ)

を、あししろのぬす人とはけうぜられしぞかし。  
などくおろかなりし也。なをのたまへ」とのたまへば、  
女、「何事をおもはん」。「いさ、されど御けしきいとくるし。  
おもひこそへだて給けれ」とのたまへば、女、  
へだてける人のこゝろをみくまのゝうらのの  
はまゆふいくへなるらむ」。おとこ君、「あなこゝろ。されば  
よな、なをおぼす事有けり。

さのゝうらにおふるはまゆふかさねなちひとへ  
にきみをわれぞおもへる」こゝろならでや、ものしき事

もきゝ給はん。なをのたまへ」ときこえ給へり。たしかならぬことにもこそあれとおもひて、ものもいはでやみぬ。

あけぬれば、たちはきに衛門がいふ、「しかぐゝの事あるべか  
(99・ウ)

なるを、こゝろうくもいはぬにこそ。つゐにかくれあるべき

事かは」といひければ、「さらにさる事きかず」といへば、

「されど、外の人さへきゝて、人々のもとにいとをしがり

とぶらふものを、しらぬやうはありなんや」といへば、「あやし

き事かな。きみの御けしきいまみん」といふ。中将殿、

とのまいりて、いとおもしろきむめの有けるを折て、「こ

れみ給へ。よのつねなんにぬ。みけしきもこれになぐさみ

たまへ」といふ。女君、たゞかくきこえたまふ。

うきふしにあひみることはなけれども人の心のはなはをうし」とてなん、花につけかへし給へれば、

中将いとあはれにおかしとおぼす。なをあれことこゝろ

ありときゝたるにやと、くるしうて、立帰、「さればよ、

(100・オ)

おぼしうたがふ事こそ有けれ。さらにつみなしとなん、

只今はおもひ給ふるを、まろがこゝろのほどはなをみ給へ」とて、

うき事に色はかわらぬ梅の花ちるばかり

なるあらし成けり」と、をしはかり給へ」とのたまへれば、女、

さそふなるかぜにちりなばむめのはなわれや

うき身になりはてぬべき」とのみぞあはれに」とあるを、

いかなる事をきゝたるにかあらんとおもひ給へるほどに、

御めのといできていふやう、「かの右の大どの事は、のたまひし

やうにものし侍しに、『わざとやんごなきめにもものし

給ふはざなり。時々かよひてものしたまへかし。とのみき

こえて、四月となんおもふ」といそがせ給ふ也。さるこゝろ

したまへ」ときこゆれば、いとづかしげにゑみて、「なでう、

(100・ウ)

をのこのいなとおもふ事、しゐてするやうやはある。世の

人にゝず、よき身にもあらねば、さの給ふ人もあらじ。

かゝる事なまねび給そ。かたはなり。わざとのめにもあら

ざなりとはいかでかしりたまふ。いとさいふばかりなき人に

もあらぬを」とのたまへば、めのと、「あなわりな。もともしかと

おぼしたちていそぎ給ふものを。よし、御らんぜよ。やん

ごとなき人のしゐての給はん事を、いかゞはせさせたま

はん。なにかは。きみたちは、はなやかに御めがたのさしあひて、

もてかしづきたまふこそいまめかしけれ。おぼす人有、

さてもそれをばさるものにて、御ふみなど奉たまへ。かの

きみも、おもふ時は、かんだちめのむすめにはあんなれど、おち

くぼの君とつけられて、中のおとりにて打はめられ

(101・オ)

てありけるものを、かくたぐひなくおぼしめしづく

こそあやしけれ。人は、かたへはちゝはゝゝゑたちてかし

づかるゝこそこゝろにくけれ」といふに、中将、おもて打あか

めて、「ふるめかしきこゝろなればにやあらん、いまめかし

くこのもしき人もほしからず、おぼへもほしからず、ちゝはゝ

ぐしたらんとおぼえず。おちくぼにもあれ、あがりくぼに

もあれ、わすれじとおもはんをばいかゞはせん。人のいはんこと

おほく、そこにさへかくのたまふこそ心うけれ。たゞ御ために  
こゝろざしなきにおぼすとも、いまかれもつかうまつる  
やうありけん」とて、いとたのもしげなるけしきにて立  
給ふめるを、たちはき、つくぐときゝて、つまはじきをかた  
くとして、「なでうかゝる事申給ふ。きみと申しながらも、

(101・ウ)

はづかしげにおはすとはみ奉らずや。たゞいまの御なかは、人  
はなちげに、かのの給へるやうに、こゝろざしたがはず、はなや  
かなるかたにやり奉て、御とくみんとおぼしたるか。あな心  
う。すこしよろしき人の、さるこゝろもたるやはある。

なでう御なだてのおちくぼぞ。おひひがみなてけり。これ  
をかのあたりにきゝ給て、いかゞおぼすべき。いまよりかゝる  
事のためふな。きみのおぼしたる事いとはづかしくいと  
をし。この御めのいとわりかたやいとえまほしくおはす  
る。さらずとも、これなり侍らば、御身ひとつはつかうまつり

てんものを。かやうの御こゝろもたる人は、いとつみふかくなり。  
またきこえ給はゞ、これなり法師になんと、いとくをし」  
といふ。「いらへもせさせずもいひなすかな。なき人のおもふ

(102・オ)

中きるは大事にはあらずや」といへば、おとゞ、「たれかは、たゞ  
いま』さり給へ、すてたまへ』ときこゆる。「さて、さにはあらず  
や、

めあわせ奉り給は」。いで、あなかしがまし。とりはてどもさま  
あしからんか。などかおどろぐしうはいふべからんは。かたへはめ  
をおもふなめり」。いとをしとおもひながら、くちふたげに

いへば、たちはきわらひて、「よし／＼、なを申そゝのかさん  
とおぼしめしたり、たゞこれなり、法師に成侍なん。御  
つみいとくをし。おやの御世をばいかでかしらざらん」と  
て、かみそりわきにはさみてもたり。「またいひいでたま  
わんおりふし、ふとかきそがん」とて、おとゞ、ひとり子成けれ  
ば、かくいふをいといみじとおもひて、「くちからいとゆゝしき  
事をもきくかな。はさみたらんかみそりうちやおらぬと

(102・ウ)

こゝろみよ」といへば、たちはきみそかにわらふ。きみはさらに  
どうじ給べきにもあらず、わが子のかくいふとおもひて、  
ふようなるましきこえ奉らんとおもふ。中将のきみは、

女君のれいのやうならずおもひたるは、この事きゝ  
たるなめりとおぼしぬ。二条におはして、「御心のゆかぬつ  
みをきゝあきらめつるぞうれしけれ」。女、「なにごとぞ」。大将

殿

のことなりけりな」との給へば、女、「そらごと」ゝてほゝゑみてあ  
たまへれば、「ものぐるをし。みかどの御むすめ給ふとも、よも  
え侍らじ。はじめもきこえしを、たゞつらしとおもはれ  
きこえじとなんおもへば、女のおもふ事は、また人まふくる  
事こそなげくなりときゝしかば、そのすちはたえにした

(103・オ)

り。人々とかうきこゆるども、あらじとおぼせ」とのたまへば、  
「さおもはんと、したくづれたるにやあらん」といへば、「おもひ  
きこゆときこえはこそ、あやうしものたまはめ。たゞつらき  
めみせ奉らじときこゆれば、心ざしのあるかは」などきこえ

たまふ。たちはき、ゑもんにあひて、「さらになんおもひうたかいたまふぞ。この世には御こゝろうかるべきにあらざ」といふ。御めのといとをしくいはれて、又もうち出ず。かののにかくおほしかよふ所有けりときこえて、おぼしたえにけり。かくおもふやうにのどやかに、おもひかはしすみたまふほどに、はらみ給にければ、ましておろかならず。四月、大将殿の北方、宮たち、さじきにて

物み給ふに、中将の君に、「二条にもみせきこえ給へ。よくものしたまふ人は、物見まほしくしたまふ物を。おの  
(103・ウ)

れもいまゝでたいめんせぬ、心もかなきに、かゝるつゐでにとなんおもふ」ときこえたまへば、中将いとうれしとおもひたまへるけしきにて、「○かなるにか侍らん、人のやうにもゆかしくも侍らざめり。いまそゝのかしてまいらせん」ときこえたまふて、二条におはして、「うへはかくなんのたまふかし」ときこえたまへば、「こゝちのなやましうて、あやしげに成たるもおもひしられて。物見に出たらば、我みえたらんに、いとわりなからん」とてもものうげなれば、中将、「たれかみん。うへ、中君こそは。それまろがみ奉る、おなじ事」とて、しめてそゝのかしきこえたまへば、「御心」ときこえ給ふ。北方御ふみにも、「なをわたりたまへ。おかしき見事も、いまはもろともにとなんおもひ給ふ」などきこ  
(104・オ)

えたまふ。みたまふにつけても、かの石山まふでの折、ひとりゑりすて給ひしもおもひ出られて、こゝろうし。

一条のおほちに、ひわだのさじきといかめしうて、おまへにみなすなごしかせ、せんざいうへさせ、ひさしうすみたまふべきやうにしつらひ給ふ。あかつきにわたり給ひぬ。ゑもん、少なごん、一仏じやうどにむまれたるにやあらんとおぼゆ。このきみにいさゝかこゝろよせあらん人をばねたき物にいひのゝしりしをみならひたるに、だいの御かたの人たち、いたわりよういしたまふさま、いとめでたしとおもふ。めののおとど、さこそいひしか、いできて、心しらひつかうまつりて、「いづれかこれなりがあるじのきみの」ととひありきて、わかき人々にわらはる。母君は、「なにかそ  
(104・ウ)

とくしくおもひきこえん。おもふべき中は、むつまじくなりぬるのみなん、のちもうしろやすく」とて、うへや中君などおはする所に入奉りてみ給ふに、わが御むすめ、姫宮にもおとらず、おかしげにてみゆ。紅のうちあわせかさね、ふたあいのおりものゝうちぎ、うすものゝきふたあひのこうちぎき給ひて、はづかしとおもひたまへる、いとおかしうにほへり。姫君はげにたゞの人ならず、あてにけだかくて、十二ばかりにおはしませば、まだいとわかういわけなう、おかしけ也。中の君は、わかき御こゝちにおかしとおぼして、こまやかにかたらひきこえたまふ。物見はてぬれば、御車よせて帰り給ふ。中将の君、やがて二条にとおぼせど、北方、「さはがしうて、おもふ事きこえずなりぬ。いざ  
(105・オ)

たまへ。一二日もこゝろのどかにかたらひきこえん。中将の物

さはがしきやうにきこゆるはなぞ。をのがきこえん事に  
したがひたまへ。中将はいとにき心ある人ぞ。なおもひた  
まひそ」とて、わらひたまふて給へり。御車よせられたれば、  
くちには宮、中君、しりにはよめのきみとわれとのり給ふ。  
つぎくゝにみなりのり給ふて、中将殿みなのりて、大将殿に  
おはしぬ。しん殿のにしのかたをにわかにしつらひて、おろし  
奉り給ふつ。ごたちのゐ所には、中将のすみ給ひしにしの  
たいのつまをしたり。いみじくいたわりたまふ。大将殿も、  
いみじきおもふ子の御ゆかりなれば、ごたちにいたるまで  
いたわりたまふ。四五日おはして、「いとなやましきほどす  
ごし過して、のどやかにまいらん」とてかへり給ぬ。まして、

(105・ウ)

たいめんし給ひてのちは、あはれるものにおもひ  
きこえたまへり。かくて、たとしへなくおもひきこえ給ふ。  
君の御こゝろはいまはとみ給ひてければ、中将のきみに  
きこえ給ふ、「いまはいかで殿にしられ奉らん。をいたまへれ  
ば、夜中あかつきの事をもしらぬを、み奉らでややみ  
なんところほそくなん」。中将殿も、「さやうにおはすべけ  
れども、なをしはしねんじて、なしらせ奉り給ふぞ。し  
られてのちは、いとおしくて、え北方をてうぜじ。いますこし  
てうぜんとおもふこゝろ有。又、まるもいますこし人々しくな  
りて。中納言はよにとみ給はじ」とのみいひわたり給ふに、  
つゝみてのみすぐし給ふに、はかなくて年かへりて、正月  
十三日、いとたいらかにおの子ゝうみ給へれば、いとうれし

(106・オ)

とおぼして、わかき人のかぎるして、うしろめたしとて、  
おとこぎみの御めのとむかへたまひて、「うへなどのしたまひ  
けんやうに、萬つかうまつれ」とてあづけ奉たまふ。御ゆ殿  
などしゐたり。女君の打とけたまへるをみて、むべ成けり、  
きみのあだわざをしたまはぬはとおもふ。御うぶやし  
ない、われもくゝとしたまへれど、くわしかゝず。おもひや  
るべし。たゞしるかねをのみ萬にしたりける。あそびのゝ  
しる。かくめでたきまゝに、ゑもん、いかで北方にしらせばや  
とおもふ。御めのは、少なごん、子うみあわせたりければ、せさ  
せたまふ。これをうつくしがり、かしづきたまふ。つかさめし  
に、ひきこえ中納言になり給ぬ。蔵人少将、中将に成給ぬ。

大将殿は、かけながら大臣に成給ぬ。右のおとこのたまふ、  
(106・ウ)

「かくこのむまれたるに、おほち、ちゝ、よろこびをする。かし  
こき子なり」と申給ふ。いまはましておぼえば、ことにはな  
やぎまさりたまふ。衛門督さへかけ給ひつ。中将はさい相に  
なり給ひぬ。中納言は、かく少将なりあがり給ふにつけても、三の  
君、北方、など名残ありてだに、時々くまじきと、いみじく  
ねたためども、かひあるべくもあらず。衛門督、おぼへのまさり、  
わが身の時になり給ふまゝに、中納言殿に、ふくかぜに  
つけてもあなづり、てうじ給ふ事もおほかれど、おなじ  
事のやうなればかゝず。又の年の秋、また男君うつく  
しうてうみ給へれば、右の大将殿の北方、「うぶやしないに、  
うつくしういそがしうもとりつゞき給へるかな。このたび  
はこゝにあづかり奉らん」。御めのとぐしてむかへ奉り給ふ。たち



(107・オ)

はきは左衛門のぜうにて、藏人す。かくおもふやうにて、めでたくおはする。中なごん殿にまだしられたまはぬ事をあかずおぼす。中納言は老ほけたまへるうへに、ものおもひのみして、をさく／＼出まじらいたまふ事もなし。つく／＼と入み給へり。おちくぼの君のつたへえ給へりけるいゑ、三条なる所にて、いとおかしかりけるを、「いまは世になくなりわたれば、われこそれうぜめ」とのたまへば、北方、「さなる事。よにいきたりとも、さばかりのいゑりやうずばかりにはあらざらまし。よきあゝたち、われらがすまんに、いとひろう、よし」といひて、ふたとせいでくるさうの物をつくして、ついぢよりはじめてあたらしくつきまはして、ふるきひとまじらず、これを大事にてつくらせたまふ。かく

(107・ウ)

て、ことしのかものまつりは、いとおかしからんといへば、ゑもんのかうのとの、「さう／＼しきにごたちに物みせん」とて、かねてより御車あたらしくてうじ、人々のさうぞくどもたびて、「よろしうせよ」との給ひて、いそぎ、その日になりて、一てうの大路のうちぐいうたせたまへれば、いまはとていへども、こればかりかはとらんとおぼして、のどかに出給ふ。くるま五ばかり、おとな廿人、ふたつは、わらは四人、下つかい四人のりたり。おとこ君ぐしたまへれば、御前、四位五位いとおほかり。おとこの侍従なりしは、今は少将、わらはにはおはせしは兵衛の佐と、もろともにみんとときこえ給ければ、みなおはしたりける車どもさへそわりたれば、はたちあまりひきつゞきて、み

なしだいどもにたちにけりとみおはするは、わがくいしたる

(108・オ)

所のむかゝに、ふるめかしきびりやうをひとつ、あじろひとつたり。御車どもたつるに、「おとこくるまのまじらひもうとき人にはあらで、したしうたてあわせて、みわたしの北南にたてよ」とのたまへば、「このむかゝなるくるま、すこし引やらせよ。御くるまたてさせん」といふに、しうねがりてのかぬに、「誰がくるまぞ」とはせ給ふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中なごんのにもあれ、大納言のにもあれ、かばかりおほかる所に、いかでこのうちぐいありとみながらはたてつるぞ。すこしひきやらせよ」とのたまはずれば、さうしきどもよりて、車に手をかくれば、くるまの人いできて、「など、またさうとたちのかうする。いたうはやるさうしき哉。がうけたつるわが殿も、中なごんにおはするや。一条

(108・ウ)

の大路も、みなれうじたまふべきか。がうほう」とてわらふ。「にし、ひんがし、さい院もおちて、よぎみちしておはすべかなるは」と、くちあしきをのこ又いへば、「おなじものを、とのをひとつくちないひそ」などいさかひて、えとみにひきやらねば、男君たちの御車どもまたえたてで、御前の人々、きみ、左衛門藏人をめして、「かれおこないて、すこしとおくなせ」とのたまへば、ちかくよりて、たゞひきに引やらす。をのこどもすくなくて、えふとひきとめず。御三四人ありけれど、「ようなし、たびのいさかひしつべかめり。たゞいまの太政大臣のしりはけるとも、このとのうしかいにて、ふ



れてんや」といひて、人のいゝのかどに入て、たてり。め  
をはつかにみいだして、うる。すこしはやうおそろしき

(109・オ)

ものに世におもはれ給へれど、じちの御ころはいとなつ

かしよう、のどかになんおはしける。「いとむとくなるわざかな。

いまはいかゞいらふべき」などさだむるに、このてんやくの

すけといふしれものおきなありければ、「いかでか、ころにま

かせてはひきやらせん」といひて、あゆみいで、「けふの事

はもはらなさけなくはせらるまじ。うちぐいうちたるかた

にたてたらばこそさましたまはめ、むかいにたてたる車

をかくするはなぞ。のちの事おもひてせよ。またせん」と、

しれものはいへば、ゑもんのせう、てんやくとみて、とし

ごろくやつにあわんとおもふに、うれしとおもふ。君もまた

てんやくとみ給ひて、「これなり、それはいかゞいはするぞ」と

のたまへば、ころえて、はやるさうしきどもにめをくはず

(109・ウ)

れば、はしりよれに、「のちの事おもひてせよとおき

なのいふは、とのをばいかにし奉らんぞ」とて、ながあふぎ

をさしやりて、かうぶりをはくとうちおとしつ。もとゞ

りはちりばかりにて、ひたいはげいりて、つやくとみ

ゆれば、物みる人にゆづりてわらはる。おきな袖をかつ

きてまどひ入に、さとよりて、一あしづけるに、「のち

の事いかでぞある、くしつ、ころのかぎりは、おきなの

しれぬべかなりて、てきおともせず。きみ、「まなく」とそら

ぜいしをしたまふ。いとみじげにふみふせて、くるまに

かけてひきやるに、をのこどもみこりて、おぢわなつき

て、え車につかず。よそ人のやうに、さすがにそひて、ほ

かのこうちひきもきて、みち中に打すていぬ

(110・オ)

るにぞ、からうじてをのこどもよりきて、ながえもたげ

たるけしきいとあしげ也。北方よりはじめて、のりた

る人、「ものもみじ。かへりなん」。うしかけて、うちはやめ

ておいまどひてかへるは、いさかひしけるほどに、一車の

とこしぱりをふつくとときりてければ、おほちなかに、

はくとひきをとしつ。下らうのものみんとわなつき

さわぎはらふ事かぎりなし。くるまのをのこども、あし

をそらにて、まどひたふれて、えふともかげず。「いで

たまふまじきにや有けん、かくいみじきはぢのかぎり

をみる事」と、つまはじきをしつとまどふ。のりたる人

の心ち、たゞおもひやらん。みなつきにけり。北方、むすめ

どもはみな口のかたにのせて、我はしりのかたにのりたれけ

(110・ウ)

れば、こよなきよがみよりひきおとしけるに、ながえ

ばかり出たりける。からうじてはいのりにけれど、かいなつ

きそこなひて、をいをいとなき給ふ。「いかなるものゝむく

いにかゝるめみるらむ」とまどひたまへば、御むすめども、「あ

なまかく」との給ふ。からうじて御前の人々たづねき

きて、みるに、かゝるのいみじとおもひて、「どうかきすへよ

とおこなひいでたるに、みな人々、いとむとくにある御車

のぬしたちわらふ。いとはづかしようて、さはやかにい

ぬに、おもてをみかわしてたてり。からうじてかいすへてやるに、北方、「あらく」とまどひたまへば、ねりつゝやる。からうじてとのおはしたれば、御車よせられたれば、北方、人にかゝりて、たゞ時のまになきはれており給へば、「な

(111・オ)

ぞく」とおどろき給へば、かうく、しかありつるよしをかたり申せば、中納言、「いみじきはぢなり。我、法師に成なん」とのたまへ共、いとくをしようて、えなり給はず。

世の中にこの事をいひわらひのゝしければ、右のおとゞきゝたまひて、「まことにや、しかくはせし。女車をなさけなくしたり

といふなるは。そのうちに、かの二条のものときゝしは、いかにおもひてせしぞ」とのたまへば、衛門督、「なさけなしと人のいふばかりのことも侍らず。うちぐいうちたて侍し所に、

たて侍し。をのこども、『所こそおほかれ、こゝにしも』といひ侍しを、やがてたゞいひにいひあがりて、くるまのとこしばりをなんきりて侍ける。さて、人うちなるは、それは

なめげにいひたてりしを、にくさに、かぶりをなん打ちおとして、

(111・ウ)

をの子どもひきふれ侍し。をのづから少将、兵衛佐もみ侍りき。人もものしといふばかりの事もし侍らず」とのたまへば、

「人のそしりなおいそ。さおもふやうあり」とのたまふ。女君はいとをしがりなげき給へば、ゑもん、「さいりて、いたくなおぼしそ。あいなし。おとゞのおはせばこそあらめ、てんやくがうたればかのしるしや」といへば、女君、「いとむべきなかりける。わ

人にあらで、きみの人になりね。それこそかくものはしうねくおもひいへ」とのたまへば、「さは、衛門、わがきみにつかうまつらん。

ゑもんがおもひしかぎりの事をせさせ給へば、げにおまへよりもたからの君となんおもひ奉る」といふ。かの北方はいみじうやみくるしがる。御子どもあつまりて、ぐわんたてなどして、やめ奉りてけり。

〈付記〉

本稿の資料の閲覧及び翻刻掲載の御許可を賜りました九州大学附属図書館に、深甚の謝意を申し上げます。

(りよう たん・本学大学院博士後期課程)